

平成二十二年五月六日

初めて句会なるものに参加

新入り歓迎の席題 「志」

立川談志 病から還りマスコミ出演

新緑や談志還るの報せ聞く

梅雨

なべて同じ葉色となりて梅入りかな

魚二匹波紋の光る走り梅雨

大倉山記念館前の大木

花百も泰山木に雲暗し

風吹きて萼まで朱き花石榴

咲き出して稚児のやうなる濃紫陽花

北の丸公園 近衛歩兵第一連隊跡

兵（つはもの）が夢か都の山ぼうし

大倉山雑詠

極めたる葉先翹割る天道虫

六弁のどくだみのある田畔かな

のうぜんの色濃きのある空家かな

小学校で蚕を飼っているらしい

子等の手の宝の箱に夏蚕かな

六月十八日〜二十二日、北海道に旅する

釧路湿原展望台

バス降りてエゾハルゼミの声しきり

根室半島近く 太平洋岸

無砂干場花柄靴の昆布引き

富良野

丘の道麦の穂波の薄白き

石狩峠

辰砂鉞人の名残のルピナス花

裾野山荘の隣家の人逝く

ねじ花の門に咲く家を見舞いけり

七月七日、新橋演舞場 団十郎の歌舞伎見物

暫くの仮の歌舞伎座驟雨くる

代々木青少年センター―新体操合宿

少女等の小さき尻に夏光る

義父誉めて桃の目利きを講釈し

暗灰に明るき隙間蒼き富士

栄助新盆

回想

枕辺の蠟梅凜と咲き留め

寒き日と語りつ兄と門火焚く

億土来て茄子馬脚下猫侍り

茄子の馬に父の嫌ひし猫侍り

棚経を猫半醒で聞き流し

棚経の僧侶見送り犬うだる（泰元）

今何種（いくつ）蟬の鳴くやと謎懸かり

栄助書斎

主亡き本の背表紙蚊遣香

この年記録的猛暑

水口に兄と話して今年米

片陰の融けある路地や犬うだり

山手線

楽器負ひ弱冷房車を過ぐ少女

土手草も枯れたり記録の猛暑かな

横浜市が尾高校

ラニーニヤの九月灼熱の体育祭

母ゆり

大暑

母病みて右瞼の重し大暑かな

晩夏

法師蟬コロラトウーラの挽歌唱

暑き日や見つむる写真十三歳

重陽

重陽や母黙榮を彼岸に見

重陽は彼我に分かれて迎えけり

九月二十日、敬老の日

敬老の日や百越えてある母の脈

敬老や徹夜で数ふ母の呼吸（いき）

林檎食む深夜の母の病院に

九月二十二日深夜逝く

秋海棠偲ばる童子の許に発ち

病院の裏口を出て小望月

枕辺に兄コスモスを手折りけり

母逝きし朝揃いたる彼岸花

針箱と菜の種が供秋の空

十一月三日 四十九日

サフランを摘み取る指に秋の色

母懐かしほうれん草の霜被り

晩秋の法事や義姉のきりたんぽ

大倉山雑詠

さしもの猛暑行って秋

新蕎麦の柔らかき端を手でつまみ

箱根峠

穂すすきの羊のごとき一号線

鶴見川新幹線橋梁付近

木犀の並木に入れば現かと

白萩の並びて咲ける道見つけ

給湯器二度程上げる初時雨

起重機立つ里の紅葉を睥睨し

日めくりの薄きに蜜柑味深く

ばらばらと木々の個性や銀杏散る

師走

第九聴く手の咳止めの汗ばみて

外苑の銀杏見むとて遠回り

日比谷公園ミニスカートのボランテア

落葉掃きに精をだしていた

落ち葉掃くボランテアの膝眩し

主婦たちの群れなす師走のゴッホ展

裾野山荘

侘助の藪の猛きにたちろぎぬ

塩辛きラーメン背中（せな）に寒き風

刈り上げて首筋寒し大晦日